

Fatima Sadiqi,

*Women, Gender and Language
in Morocco.*

Leiden and Boston : Brill, 2003, xvii+336pp.

なか がわ けい
中 川 恵

I

アフリカ大陸の北西端に位置するモロッコにイスラームが普及したのは7世紀のことである。それ以降、モロッコの公式文書はアラビア語で書かれることとなった。人々が話す言語は、先住のアマズィグの人々（いわゆるベルベル人）の言葉であるベルベル語にモロッコ方言のアラビア語が加わった。さらに20世紀初頭にモロッコ北部と南部をスペインが、フェズやマラケシュ、カサブランカ、ラバトを含む中央部をフランスが保護領としたことから、1956年に独立を獲得して以降も、スペイン語やフランス語も広く使われるようになった。とりわけ経済やビジネス分野での就業にはフランス語の能力が現在に至るまで不可欠である。

モロッコの国語は憲法で定められているとおりアラビア語である。しかし実際の言語状況は上述の5つの言語が共存する複雑さを呈している。イスラームの解釈とも複雑に絡み合って形成されてきた男性優位社会のなかで、そのような多言語状況を生きる女性たちは、いったいどのような言語戦略を用いているのだろうか。これが本書のテーマである。

いわゆる女性問題は中東研究において頻繁に取り上げられるテーマのひとつであるが、ひとくちに「中東地域の女性」といっても、彼女らを取り巻く環境は、実に多様である。中東・北アフリカ地域に位置しており、アラビア語を国語とし、イスラームを国教としている点については、モロッコは他のアラブ諸国となんら変わらない。しかし、歴史的経緯を鑑

みれば、多くの国々同様、現在のモロッコ社会は独自の社会形成を遂げてきた。このモロッコ社会の独自性を重視し、モロッコ社会内部の多様性に目を向けて、本書は執筆されている。

これまで中東地域のジェンダー問題を扱った研究は数多いが、モロッコ社会、そしてモロッコの女性の多様性にも注目しつつ、ジェンダーを言語の観点から扱った、英文の研究書は本書を含めてまだ数少ない。

II

中東地域の一部を形成する北アフリカに位置するチュニジア、アルジェリア、モロッコ3国の女性たちを取り巻く状況は、法的な状況だけをとってみてもそれぞれ大きく異なる。

チュニジアは一夫多妻を法律で禁止した数少ない国のひとつである。1957年に制定された家族法では、マグレブ諸国で初めて男女平等が明記された。アルジェリアは2004年に家族法の改正をおこない、女性から離婚を要求する権利が、条件付ではあるものの、認められることとなった。

モロッコでは、1999年7月に前国王ハサン2世が死去し、現国王ムハンマド6世が36歳の若さで即位した。ムハンマド6世が強調しようとした国王像は「リベラルな改革者」である。同月30日の即位の際におこなったスピーチでは、「立憲君主制を堅持し、複数政党制、自由経済、地方分権化、法の支配、人権尊重、個人の自由を推進する」と明言した。また「父ハサン2世のすすめてきた教育改革計画と連動させて雇用問題の改善に尽くす」と、モロッコで最も深刻な社会問題のひとつである失業問題にも言及した。

社会における女性の立場についても「リベラル」な立場をとっている。これまで国王の後は名前さえ公表されることがなかったが、ムハンマド6世は結婚パレードをおこない、妻をマスメディアの前に出した初めての国王であった。ララ・サルマ妃は2005年の愛知万博訪問などを含め妃単独でも数々の公務をこなしている。

ムハンマド6世は、女性の地位に大きくかわる家族法の改正についても着手し、2004年に改正家族法を制定した。主な改正点は次のとおりである。まずこれまで夫のみが有していた家族に対する責任が、夫婦双方に認められることになり、「妻の夫に対する服従」という文言が削除された。また、女性の婚姻可能年齢が15歳から18歳に引き上げられ、2人目以上の妻を娶るには裁判所の許可を要するようになった。さらに女性に対して離婚要求権が付与され、離婚女性が再婚した際、これまで子供は前夫のもとで養育されるようになっていたが、そのまま母親のもとで育てることが認められるようになった。また非嫡出子の認知が認められるようになった。

女性の非識字率について、マグレブ3国の状況を比較すると、モロッコは(1)15~24歳で39.5パーセント、(2)15歳以上で60.4パーセント(2004年)^(註1)であり、アルジェリアが(1)同13.9パーセント、(2)同39.9パーセント(2002年)^(註2)、チュニジアが(1)同7.8パーセント、(2)同34.7パーセント(2004年)^(註3)であるのに比べて飛びぬけて高い。また、小学校または中学校に在籍あるいは修了した10歳以上のモロッコ女性の割合は都市部52.9パーセント、農村部25.2パーセントと大きく差がある^(註4)。

西欧の文献に散見される「貧しく、ベールをかぶり、教育を受けておらず、犠牲を強いられ、性的に抑圧され、従順な主婦」といったステレオタイプ化された、また単純化されすぎたモロッコ女性に対するイメージを打破し、モロッコの女性の「多様性」を分析し、男性優位主義のモロッコ社会における彼女らの「言語戦略」を明らかにすることを目的として、本書は執筆された。

III

本書は序論、5章および結論から構成されている。

序 論

第1章 モロッコにおけるジェンダーと言語——
理論的・政治的問題——

第2章 モロッコの諸言語における文法、意味論、
実践上の男性中心主義

第3章 社会的差異

第4章 文脈的差異

第5章 自己内部の差異

結 論

序論以下の各章の内容について、ここでは大まかに紹介したい。

まず序論では、執筆に至った経緯が「話者(男性あるいは女性)が母語について同様の『能力』を獲得しているにもかかわらず、日常の『言語運用』の場面で同じように使用することは稀である、という逆説的な事実」に常々興味を抱いていたこと、そして著者が「次第に、ジェンダーというそれ自体複雑な概念を、様々な言語運用を脱構築する分析的手段として用いることができるのではないかと気づき始めた」点であると語られている。さらに自らがモロッコ人女性の言語学者であることから、複合言語、複合文化を持つムスリムの国であるモロッコの言語とジェンダーのかかわりを研究分野として設定した。出発点として著者自らに発した質問は「『ジェンダー』や『フェミニズム』という語について、それらの語が最初に使われた西欧の人々が抱く意味と対比して、モロッコ人にとって、そしてより一般的にアラブ人やイスラーム教徒にとって、それらの語はいかなる意味を持つのか」、「モロッコにおけるジェンダーの認識やパフォーマンスに、歴史、地理、イスラーム、口承性、伝統がどのような影響を及ぼしているのか」、「理論が欠如しているところに思考は生まれないことを鑑みれば、これらの質問が取り上げられ議論されるべき理論的枠組みとはどのようなものであろうか」、「その特定の理論は、日常生活の男女関係を規定しているだけでなく、暗示的に影響を与えているモロッコの社会文化的文脈における権力関係から分離しうるだろうか」、「言語を通して、包括的な権力構造における女性の活動を浮き上がらせることができるだろうか」というものであった。

さらに理論的な仮説としてあげたのは、ジェンダーの認識と女性の活動に対する理解は特定の文化における権力構造のなかにおいてのみ可能で、言語はその権力の重要な手段であるということである。モ

ロッコの場合、権力の上部構造を構成し、相互に作用する文化的構成要素が存在する。歴史、地理、イスラーム、口承性、複数言語主義、社会組織、経済的地位、政治システムがそれである。この権力の枠組みのなかに、社会的差異、文脈的差異、アイデンティティーの差異といった要素が、ジェンダーの日常的パフォーマンスに影響を与えていると仮定されている。本書では、モロッコ女性の活動が、それ自体抵抗の強力な現場である言語の創造的用法を通して提示される。

第1章ではモロッコのジェンダーと言語の研究に関する理論的、政治的問題を議論するための基盤を提供する目的で、これまでの研究史が簡潔にレビューされている。

言語とジェンダーを理論化するうえで、影響力のある見方は「本質主義」(essentialist)と「構築主義」(constructionist)の2つである。

本質主義的な立場では、ジェンダーは、生得性、厳格な二項対立性、二極性という3つの特徴を有すると定義される。なかでも二極性が最も広範に言及される特徴である。人間は完全に男性か女性であり、「部分的に男性」あるいは「部分的に女性」ではない。曖昧な性の呈示は自動的に「逸脱」あるいは「正常ではない」と分類される。二分法は無意識のレベルで機能していると考えられた。人間のたいていの文化では、男性は人目につかず、普遍的で、第1のもので、優性で、より大きなカテゴリーであると考えられ、女性は人目につき、特別で、第2のもので、劣性で、より小さいカテゴリーであると考えられてきた。

構築主義的な見方では、ジェンダーは静的ではなく流動的な概念として概念化され、ジェンダーに関するあらゆることは「構築される」と考えられる。このような見方は、「人間の性」のスペクトルには幅広い多様性があるという仮説に立脚している。

本質主義的な見方と構築主義的な見方の最大の違いは、前者はジェンダーを、エスニシティ、年齢、階級といった他の社会的範疇とは独立した範疇であるとしているのに対し、後者の見方ではジェンダーは他の社会的範疇と相互に関連性があると考えている点であ

ると指摘している。

本質主義、構築主義、あるいは両方の見方の組み合わせたものにもとづいて、言語とジェンダー間の関係について多くの理論がこれまで議論されてきた。主なものは、(1)欠損理論、(2)支配理論、(3)差異理論、(4)改革主義理論、(5)急進理論、(6)実践重視理論、(7)記号学主義理論、(8)ポスト・モダニズム理論などである。

本質主義と構築主義的な見解は、はっきりと区別できるわけではないが、ジェンダーとは本質的なものというよりむしろ構築されたものとして理解するほうが、現実の文脈でおきている事実をよりよく説明することができるとし、本書ではモロッコ社会におけるジェンダーと言語を分析する手段として構築主義的アプローチがとられている。

モロッコの社会的・文化的文脈におけるジェンダー・パフォーマンスと女性の活動を検証するには、(1)モロッコの文化(歴史、地理、イスラーム、複数言語主義、口承性、社会組織、経済的地位、政治システム)を構成する、より幅広い権力構造、(2)社会的変数(地理的出自、階級、教育程度、職業機会、言語能力、婚姻状況)、(3)文脈の変数(身体的位置、対話者、話題、会話の目的)、(4)アイデンティティー変数(動機、重要点、最大の関心事)という4つの要素との関連でおこなうことが必要であるとする。

これらの要素は、会話のなかで相互に作用し、モロッコの男女の世界観、イデオロギー、信念、価値観、意味付けに深く影響を与える。これらの相互作用がジェンダー認識やジェンダー転覆、言語使用に影響を与え、モロッコ人女性の社会的・個人的違いは、モロッコの社会・文化的文脈のなかでのみ理解されることが可能である。

モロッコの歴史と社会状況の説明のなかで、モロッコのフェミニズムについて、西欧のフェミニズムのように権利獲得を目指した「戦闘的」フェミニズムや、他の中東諸国にみられるようにナショナリズムに根ざしたものではなく、「モロッコの土着の文化や文明と、西欧の文化・文明との邂逅」から生まれたものであると説明し、大別してリベラルなフェ

ミニズムと宗教的フェミニズムの流れがあるとしている。前者は1950年代後半にモロッコに登場し、56年の独立後、国家、政党、知識人はこれを支持した。宗教的フェミニズムに先立って登場したことで、長い間国家や政党に対してより自律的であり、より西欧文化と接触の多かった独立後のブルジョワ階級の現象であった。女性の薬剤師、法律家、医者、大学教授などの多くがこの階級の出身で、モロッコの社会・文化的文脈のなかで、「普遍的な」平等や人権の価値観を受け入れることで女性の状況を改善することを目指していた。

それに対して宗教的フェミニズムは、モロッコではリベラル・フェミニズムへの反動ではない。1970年代後半にモロッコに初めて登場し、70年代以降の2つの大きな出来事、イラン・イスラーム革命とソ連崩壊（アメリカとグローバリズムの影響を大きくした）に大きな影響を受けて発展した。西欧の観点からすれば、「(男女を分離する)イスラーム」と「フェミニズム」は共存不可能であるが、モロッコの宗教的フェミニズムは、イスラーム法の枠組みでの女性の権利を要求している。

また、第1章では、モロッコの歴史、地理、イスラーム、口承性、多言語主義、二言語の使い分け、儀礼（結婚、誕生、割礼）、名誉と倫理、タブー、政治システムなどが説明されており、モロッコの社会的状況についての入門書としても有用である。

第2章では、正則アラビア語、モロッコ方言、ベルベル語の3つの言語における父系的構造が、声の質（ピッチ）、文法、構文、意味論のレベルで分析され、モロッコの文化では、ピッチという概念は厳密にジェンダーにもとづいたものであるとする。非常に低いピッチの音は、典型的に男性的、真剣、権威主義的、信頼がおけるといったイメージで、鋭い金切り声は、女性的、おしゃべり、愚か、素朴、単純な心、うんざりした、といったイメージを持たれる。低い声は、モロッコの文化では「強い」、「権威がある」、「まじめ」と受け止められるため、モロッコの女性は、目的に達するために低い声で話をする。このようなピッチの変化は、意図的におこなわれる場合とそうでない場合があるが、いずれにせよ女性

のほうが男性よりもピッチの幅は広くなると分析する。

文法書に観察される「ジェンダー」については、正則アラビア語には男性形と女性形があり、一般に女性形は男性形から派生したものと説明している文法書が多い。しかし著者はこの仮説の正当性に疑問を投げかけている。その理由は、言語は簡素化する方向に変容するという前提に立てば、モロッコの3言語の原型は、より複雑な形態を持つ女性形であると考えるのが妥当だからである。文法書にみられるこのような男性中心主義は社会における男性優位の権力関係に関連していると分析している。

意味論上のレベルでは、モロッコの諸言語における名詞のジェンダー・マーキングが分析されている。「長」、「大臣」など指導的な立場を示す語は、女性形も存在するが、実際には男性形のみが使用され、「シェイフ」の女性形「シェイハ」は女性の長という意味ではなく、娼婦を間接的に示す語として使用されるなど、ここでも男性優位主義がみられると指摘する。

モロッコ文化のなかで期待されている「女性」像は、「勤勉」、「忍耐強い」、「従順」である一方で、女性には「感情的すぎる」、「弱い」、「よこしま」であるというステレオタイプが存在しており、このような矛盾は女性の自己像の形成にも影響を与えると指摘する。

ではそのような矛盾に対抗する女性たちの言説戦略は存在するのか。著者は、女性たちは決して受身でそのような状況に甘んじているわけではなく、戦略を持っているとする。他人がいる前での夫と妻の会話の例を挙げている。夫が妻に旅行はどこに行きたいかと尋ねたとき、妻は直接に「タンジェへ行きたい」という代わりに、間接的に「長い間北のほうに行っていないわ」と答える。こう回答することで、夫がそこに自分の意見によって修正することのできる余地を与えつつ、自分の希望を伝えることができるからである。

第3章では、女性の間には様々な「相違」をもたらず社会的な変数について分析がおこなわれている。挙げられている変数は、(1)地理的出身、(2)階級、

(3)教育、(4)職業機会、(5)言語能力、(6)結婚の地位の6つである。

これらの変数の組合せによって様々な女性像が浮かび上がるが、そのなかで、社会的に最も高い評価を受ける組合せは「都会の、豊かな、教育を受けた、仕事をしている、結婚した」女性である。逆に「田舎の、貧しい、教育を受けていない、働いていない、結婚していない」女性は、人生の様々な局面で最も限られた選択肢しか持たない。

地理的な出身、つまり都会の出身か否かという違いには、とりわけ年長の女性に関しては「文字が読めるか否か」、という社会とのかかわりにおいて最も基礎的な事項についての二項対立にも等しい意味を有していると指摘されている。使用言語については、都市部の女性は、母語であるアラビア語モロッコ方言のほかに、正則アラビア語とフランス語を使用している。それに対して田舎の女性は、アラビア語モロッコ方言とベルベル語で、いずれもマスメディアや教育、職場などでの書き言葉としては使用されていない言語である。したがって社会的な階級を上昇させるような職業に就くことは非常に難しい。しかし、同時に都市部の働いている女性は、職場では男女平等に近い意識を持って働いていても、伝統的な家父長的社会構造が生き残っている家族が中心となる場では、伝統的価値観に従う、あるいは従わざるをえないため、心理的な葛藤はより大きくなると指摘する。さらに、田舎のほうが、近隣の住民が互いをよく知っている場合が多いため、田舎の年老いた女性は、都市部の女性よりも自由に外出することができる場合があると指摘している。

第4章では、モロッコ社会において最も権力を有する場で使用される正則アラビア語へのアクセスが難しい状況におかれている女性たちの特徴的なコミュニケーションスタイルは、口承の詩や歌、民話あるいは噂話など、口頭でのコミュニケーションによる創造性の発揮であると指摘する。しかし彼女らの多くは教育を受けておらず、記述されたテキストを「転換する」ことはなく、「語る」ことによって、アイデンティティ、集団的な記憶などを生み出すと分析する。

第5章では、フェズでの自己紹介に関する実地調査の結果を踏まえて、ジェンダー・アイデンティティの分析がおこなわれている。大学、スポーツクラブ、市場、友人と出かけた場合、会議、公衆浴場、結婚式、誕生祝パーティ、卒業式などの状況で、読み書きのできる男女、読み書きのできない男女延べ100名に対してインタビュー、ビデオ撮影での調査をおこなった結果、個人の氏名、出身地、父親の名前、職業（特に医者、薬剤師、法律家、軍人、大学教授の場合）、既婚の場合は夫の氏名と職業などが、直接的、間接的に自己紹介の要素として含まれていることが指摘されている。出身地に関しては、フェズの場合、生まれ育った場所という点よりも、フェズ出身の家族に属しているか否かが重視され、特に女性の場合フェズの出身であることを他人からより高い評価を受けるために明らかにする傾向があると指摘している。

結論の章では、それまでの分析をふまえて「ジェンダー」は特定の文化の価値観によって規定され、また知覚されると指摘している。またジェンダーとフェミニズムに関する西欧の理論的モデルは、多くの価値観の異なるモロッコの社会文化にそのまま適用できない。西欧のフェミニズムは家父長制に対する強力で独創的な批判を展開した。しかしモロッコで家父長制が歴史的に階級、植民地主義、近代性、宗教的解釈によって形成されてきた点について、西欧のフェミニスト理論家は取り組んでいないと指摘する。したがって西欧のフェミニズムモデルは、非西欧の社会文化的文脈から引き出されるフェミニズムモデルと相互に参照しあい、よりグローバル、包括的で、文化交差的なジェンダーの理解をすすめる必要があるとしている。

IV

本書の冒頭で述べられていた、これまでの一枚岩的な「モロッコ女性」ではなく、モロッコ女性の内側の視点でモロッコ社会における多様なモロッコ女性像を描き、その言語戦略を分析するという所期の目的はおおむね達成されており、とりわけ次のよう

な興味深い指摘を学ぶことができる。モロッコの複数言語主義はこれまでモロッコ社会全体における権力獲得と結びつけて論じられることが多かった。分析対象はモロッコ社会全体、つまり（意識的であれ、無意識であれ）、政治的、経済的場面で主要なアクターとなっている男性が大半を占める集団であった。しかし本書では複数言語主義を権力の上部構造を構成する文化的要素のひとつと位置づけ、さらに多様な社会的、経済的、政治的背景を持つ個々の女性が、それぞれの場で「権力」を獲得するための戦略的手段として用いているという知見が出されている。

最後にあえて残念に感じられる点を挙げるとすれば、モロッコの歴史、社会状況などに関する解説にかなりの紙幅が割かれている点であろう。よりモロッコ全体の女性の多様性とその言語戦略に対する理解を深めるためには、フェズ以外の都市での調査事例を挙げ、西欧のフェミニズムモデルとは異なる理論の構築につなげてほしかった。しかしそのために本書がモロッコ社会入門書としても非常に包括的な書となっていることは評価すべきであろう。また評者が感じたこのような多少の物足りなさは、これまでの研究で指摘されてこなかった、多様な背景を持つモロッコ女性らの言語と権力獲得戦略の関連性を指摘した本書の貢献をなんら損なうものではない。

（注1） UNESCO Institute for Statistics, Education Country Profile of Morocco, (http://stats.uis.unesco.org/unesco/TableViewer/document.aspx?ReportId=121&IF_Language=eng&BR_Country=5040 最終確認日：2007年8月7日)

（注2） UNESCO Institute for Statistics, Education Country Profile of Algeria, (http://stats.uis.unesco.org/unesco/TableViewer/document.aspx?ReportId=121&IF_Language=eng&BR_Country=120 最終確認日：2007年8月7日)

（注3） UNESCO Institute for Statistics, Education Country Profile of Tunisia. (http://stats.uis.unesco.org/unesco/TableViewer/document.aspx?ReportId=121&IF_Language=eng&BR_Country=7880 最終確認日：2007年8月7日)

（注4） 'Indicateurs démographiques et socio-économiques de la population au niveau communal' in «Resensement Général de la Population et de l'Habitat 2004», Direction de la Statistique, Haut Commissariat au Plan, Royaume du Maroc, 2004. (http://www.hcp.ma/index.php?option=com_content&task=view&id=320&Itemid=68&lang= 最終確認日：2007年8月7日)

（羽衣国際大学産業社会学部准教授）